

根から幹枝までの年輪幅に着目して
樹木生産量の年変動を考える

2024年6月19日(水) 12:30~13:20



Mission1
環境診断・循環機能制御



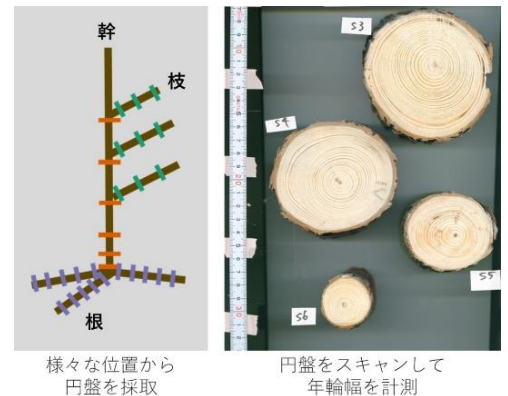
田邊 智子

生存圏研究所
ミッション専攻研究員



- ◇ 気候変動
- ◇ 樹木生産量
- ◇ 木部
- ◇ 炭素分配
- ◇ 年輪

樹木が大気中から取り込んだ炭素は、幹枝や根といった木部の生産に使われると長期間樹体内に蓄積されます。そのため木部の生産量は、森林と大気の中長期的な炭素収支を考えるうえで重要なパートです。また木部生産量は年により増減します。年変動を駆動する気象要因を明らかにするにあたり、地上高 1.3 m 位置の幹の年輪幅を指標とし、幅の広い年は木部生産量の多かった年とみなした解析が世界中で行われてきました。一方で、幹の年輪幅が広い年に、枝や根の年輪幅も広いとは限らないことが分かりつつあります。つまりこれまでの指標では、樹木個体の木部生産量の年変動を確からしく評価できていないかもしれません。今回は、枝先から根の先端までの様々な位置の年輪幅を計測し、トレードオフなどの関係を探る研究について紹介します。



定例オープンセミナーは、生存圏の様々な研究を相互に理解すべく、ランチタイムに気軽に行っている講演会です。*不定期水曜日開催

https://www.rish.kyoto-u.ac.jp/open_seminar_2022/

お問い合わせ 京都大学生存圏研究所定例オープンセミナー事務局
TEL : (0774)38-4609

